日本赤十字社
Japanese Red Cross Society
Sankyu Thank You
2022年12月号　vol.19

産休サンキュープロジェクト・ニュースレター

食料危機、このことばを聞いたとき、皆様は何を思い浮かべますか？
ウクライナの武力紛争をきっかけに、小麦やトウモロコシなどの食料価格が世界的に高騰していることでしょうか。気候変動、新型コロナウイルス感染症、ウクライナ人道危機、これら一連の事象が影響しあって、世界的に穀物、肥料、石油製品の価格が高騰していることは、連日のニュースからご存じかと思います。日本でも小麦を原料とするパンやパスタなどの価格が値上がりし、わたしたちの生活も食料危機と無関係でないことを感じますが、遠いアフリカは今、深刻な食料不足に見舞われています。今回のニュースレターでは、厳しい世界情勢の中、産休サンキュープロジェクトが支援するアフリカで暮らす人びと、女性や子どもたちの現状を取り上げます。

隠れた人道危機：アフリカの飢餓

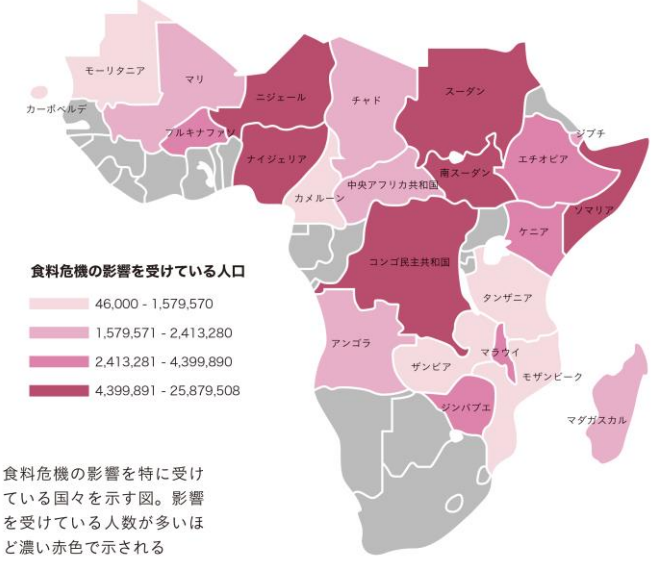
アフリカでは今、過去40年で最悪の干ばつ被害が起き、日本の全人口を超える１億4,600万人もの人びとが深刻な食料不足に陥っています。その多くが、サハラ以南のアフリカ諸国で起きています。

アフリカの食料不足はなぜ起きているの？

それは単に、気候変動による日照り、干ばつ、例外的な雨期と洪水や、バッタなど害虫の大量発生により農作物が収穫できないことだけが原因ではありません。アフリカの複数の地域で今も起こる武力紛争、暴力から逃れるため国内で発生する避難民、根底にある貧困といった要因が複合的に影響しあって、食料危機を引き起こしているのです。

アフリカでは、サハラ以南の地域の41％が国際貧困ライン以下（1人1日1.90ドル以下/食事の回数は一日１～２回）にあります。貧しさゆえに、日ごろから栄養のある食事がとれない、蓄えがないから、新型コロナウイルス感染症など予期せぬ事態が起こって職を失ったときに食べるものがない、知識や技術がないから、異常気象に負けない強い農作物を作れないなど、貧困を起因とする悪循環が起きています。

アフリカ食料危機の現状



食料危機の影響を特に受けている国々を示す図。影響を受けている人数が多いほど濃い赤色で示される

＊国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）2022年10月6日「Emergency Appeal」より

食料危機の最大の犠牲者は、女性と子どもたち

もともと貧しい家庭では女性や女の子は食事を最後にとることが多く、食料不足に伴って必然的に食べる量も減ってきます。栄養不良は妊産婦に大きな影響を及ぼし、産まれてくる子どもの健康や発達にもマイナスの影響が生じます。

サハラ以南のアフリカでは、５歳以下の子どもの３人に一人が発育不全にあります。また、出産可能年齢の女性における貧血の有病率は４割といわれています。

ケニア赤十字社は食料配布のほか、栄養失調になった子どもに補助食品を提供するプログラムも実施しています。

赤十字は、飢えに苦しむ人びとに緊急食料支援を行っています。短期的には、緊急援助によって人びとのいとちを救うことが不可欠ですが、中長期的には、貧困の連鎖を断ち切り、人びとが貧困から立ち上がるための支援が必要です。それは、将来また襲いかかるかもしれない食料危機に備えて、人びとが自らの力を蓄えること。食料支援という外からの助けがなくても、コミュニティの中で支え合い、手を貸し合える人づくり、仕組みづくりをすること。そして、貧困から抜け出せるよう、知識や技術を習得し、力をつけることです。「自分の力で立ち上がること」を赤十字では「**レジリエンスを強化する**」と呼んでいますが、日本赤十字社は、ルワンダをはじめ、東アフリカ地域と南部アフリカ地域でこうした取組みを支援しています。

芋をつぶした食べ物とバナナ、ルワンダの家庭の典型的な食事風景です。

予防に優る治療なし

ルワンダ：レジリエンス強化の取り組み

「アフリカの奇跡」とも呼ばれる東アフリカのルワンダ共和国。急速な経済成長を続けるルワンダで、日本赤十字社はルワンダ赤十字社と協力し、災害や貧困に苦しむ人びとへの支援事業を実施しています。事業対象地のルワンダ南部、ギサガラ郡。ここでは、安全な飲み水が村になく、遠くまで水汲みに行くのに時間がかかるため、学校をドロップアウトする子どももいます。慢性的な栄養不足や貧困も大きな社会問題です。これらの危機に人びとが適切に対応し、将来の危機を予防・軽減するための力をつけるよう、レジリエンス強化の取組みを支援しています。以下、ルワンダのレジリエンス強化事業の活動を写真でご紹介します。（写真提供：ルワンダ赤十字社）

写真でわかる

ルワンダ気候変動等レジリエンス強化事業

救急法を学び、いざというときに備える赤十字ボランティア

貧困家庭に家畜（ブタ、ヤギ、ウシ）を供与し、子どもが産まれたら、近所の家庭に提供することで、村のみんなに家畜が行き渡る仕組みを作ります。

衛生的な水とトイレは、健康の大前提です。安全な飲料水供給設備が村にあれば、遠くまで水汲みに行かずにすむので、女性や子どもの負担も減ります。

衛生的な住環境は、家族の健康の基本。貧困家庭を支援して、家の壁を塗り替えました。

赤十字ボランティアが拡声器を搭載した車両で村々を回り、感染症予防のための手洗いの大切さを伝えます。

村の斜面に樹木の苗を植え、地滑りを防止します。

家庭菜園で野菜を育てる村の女性、グテカさん。「庭先で育てた野菜に豆とじゃがいもを加えて煮て、最後に小魚を入れて、バランスの取れた食事を家族に食べてもらいます。」

あばばいぇい通信 日赤ルワンダ現地代表部首席代表の吉田拓がお届けします!

日本の小学校とルワンダの小学校を繋ぐオンライン交流会

日赤東京都支部は、ルワンダにおいて小学校をドロップアウト（中途退学）した児童を支援するために、東京都内の青少年赤十字加盟校と協力して募金活動を行っています。この活動は、日本「が」ルワンダを助けるのではなく、日本「と」ルワンダでより良い社会を作るために協力する、というものです。

ところが、日本とルワンダの小学生はお互いに会ったことも話したこともありません。そこで、両国の子どもたちがお互いの違いよりも、共通する点を見つけ、一緒に社会を作っていくお手伝いをするために、オンライン交流会を実施しました。

当日のイベントは30分間の生中継で行いました。日本語、英語、現地語であるキニャルワンダ語の通訳を介してコミュニケーションをとります。事前に用意された質問に子どもたちがテキパキと答えていきます。ルワンダの子どもたちは、イベントで使われたパソコンを見るのもテレビ電話も初めてです。食い入るように画面を見つめて、画面の向こうの子どもたちに手を振り、笑いかけます。あっという間に30分が経ってしまいました。終わった後に両方の会場に残った子どもたちがそれぞれのパソコンに集まってきます。ルワンダの子どもたちからどうしても日本の子どもたちに聞きたい質問があると言われます。「日本のみんなはどこで祈るの?」日本の子どもたちと先生は一瞬沈黙します。

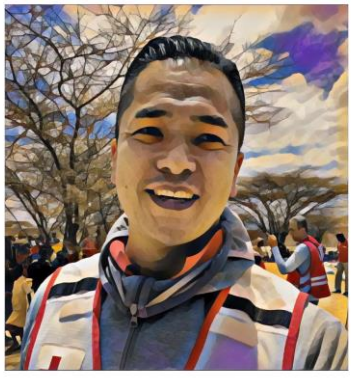
皆で相談してから、女の子が出てきて、「家族で新年に神社に行きます」と答えました。それを微笑みながら頷いて聞くルワンダの子どもたち。きっとルワンダの子どもは「家族が働けなくなってお家にお金がなくなったり、食べ物がなくなったりして不安で仕方ない時、心の拠り所にすることは何？」と聞きたかったはずです。日本の子どもたちは、行為としての「どこで祈る」について「家族の年間行事として神社に行く」と答えました。ルワンダの子どもたちは「それなら僕たちも家族と一緒に教会に行く」と感じたのでしょう。ルワンダも日本の子どもたちも、同じ人間だと言うことを強調した30分間のイベントの最後に、祈りを通して、お互いがすれ違うかなと思ったら、家族をキーワードにまた手を繋ぐことができました。

全部が全部分かり合えなくても、共通点を見つけていくのでいいと思います。こうやって手探りで共通項を探していって、みんなでより良い社会を作っていくのが国際協力だと思います。

日赤では、より良い社会を作るため、ご支援くださる皆様とクリエィティブな活動を考え、実施しています。こんなことをしたいというご要望があれば、ご連絡ください！

編集後記：

ケニアの食糧危機の現場でショックを受けて宿に戻った後、深夜にやっとお腹がすき、1人でサンドイッチを頬張りながら、配布した食料が、現地の皆さんにとってせめて数日でも家族で楽しくご飯を食べることに役立てたら、と願いました。単に食べ物を配っているのではなく、今は辛い時だけれども、後でずっと楽しく思い出せるような食事のきっかけを配りたいです。（吉田拓、日赤ルワンダ現地代表部首席代表、キガリ在住）



先日、本プロジェクト対象国のウガンダ、タンザニア、ブルンジの赤十字の同僚たちと電話会議の機会がありました。彼らは、支援を提供する地域住民たちからの率直な意見も真摯に受け止め、活動を改善する仕組みがどう機能しているか誇りをもって話してくれました。地域に真に必要とされる赤十字でいるためには、人々の声に耳を傾けることが不可欠。日赤が彼らから学ぶことがたくさんあるようです。（木村美羽、日赤本社国際部開発協力課）

世界中を不安に落とし入れた新型コロナウィルス感染症からもうすぐ3年。トンネルの先が少し見えてきたかのようにホッとする間もなく勃発したウクライナ危機。その陰に隠れて見えないアフリカの飢餓。ウクライナもアフリカも、遠くにあっても、共感し続けたいと、思いを馳せる、今年の年の瀬です。（山岸信子、日赤本社国際部開発協力課）

ご支援有難うございます

賛同企業６社（2022年12月現在）

住友商事株式会社様
SCSK株式会社様
ヤフー株式会社様
木村情報技術株式会社様
株式会社ローズマロウズ様
タキヒヨー株式会社様
（賛同開始順）

■　日本赤十字社　国際部　開発協力課
産休サンキュープロジェクト担当
電話：03-3437-7089　　E-mail: sankyuthankyou@jrc.or.jp

■　Yahoo!ネット募金を通じたご寄付はこちらから：日赤　産休サンキュー Yahoo募金　検索